



地域支援を通して学んだ 特定ケア看護師のニーズ

横須賀市立うわまち病院 山田大地

はじめに

皆さん、初めまして。横須賀市立うわまち病院の特定ケア看護師の山田大地と申します。私は神奈川県横須賀で育ち、横須賀の看護学校で学び、横須賀で働く生粋の「横須賀人間(地元ではスカっ子と言います)」です。横須賀市は神奈川県三浦半島に位置し、約38万人の人口を有します。横須賀といえば、米海軍基地や山口百恵さんの「横須賀ストーリー」が有名でしょうか？横須賀市の中央に位置するうわまち病院は地域中核病院であり、三次救急医療に対応しています。そんな地元密着型の私ですが、この原稿は山梨県上野原市で執筆しました。何故かというところ、特定ケア看護師の臨床研修を今年の3月で終え、4月から地域支援という形で上野原市立病院で勤務することになったためです。期待と不安でいっぱいな状態で迎えた地域支援でしたが、2ヵ月が経過し、毎日充実した日々を過ごしています！本記事では地域での活動や魅力についてお話しできればと思います。

初めての地域支援を通して

まず、私の経歴についてお話しさせてください。私の両親の地元は北海道で、帰省の際には千歳空港から車を長時間走らせ、祖父母に会いに行っていました。肺がんを患っていた祖父は、車で2時間ほどの病院に毎月通っており、受診のための往復だけで疲労困憊だった様子が印象的でした。祖父の受診に付き添うこともあり、

地域の病院に興味を持つようになりました。ちょうど祖父が肺がんで他界したころに、地域医療振興協会のJADECOM NP・NDC研修センターの存在を知りました。当時救命救急センターで勤務していた私は、特定行為を通して救命救急センターのチーム医療に貢献できるだけでなく、地域支援という形で働くことができるJADECOM NP・NDC研修センターのプログラムを知って「これだ！」と思いました。2年間の養成期間を経て、4月から特定ケア看護師として活動することになりました。

上野原市立病院には2名の特定ケア看護師が在籍し(1名は研修中)、3つの内科病棟の管理を行っています。私は4月から3病棟のうち1つの病棟管理をさせていただきました。具体的な活動としては、入院患者のマネジメント(身体診察や検査などの代行入力)のほか、急変時の対応などを行っています。上野原の患者さまは90歳代でも元気な方が多く、毎日こちらが元気をいただいています。上野原市立病院を退院した癌末期の患者さまが、在宅療養中に末梢静脈路の確保が困難になった事案がありました。往診医から上野原市立病院に末梢挿入型中心静脈カテーテル(PICC)の挿入の依頼があり、PICCの挿入を実施させてもらう貴重な経験をしました。在宅療養を継続する上でPICCは有用であることを再認識し、地域の往診医と病院とのシームレスな連携を前提とした地域ならではの症例でした。

地域支援での経験は病棟管理であり、全体の一部に過ぎませんが、特定ケア看護師は地域で



上野原市立病院近くを流れる桂川と満開の桜

こそ求められている存在だと感じました。地域の病院や施設では医療資源が都心に比較し限られており、上野原市立病院も病床数136に対して、常勤医は9名と非常に少ない状況でした。そうした中で常勤医は1日約250人の外来患者の診察と入院患者の管理を行っているため、多忙を極めていました。病棟での急変や患者の訴えに特定ケア看護師が対応し、トリアージすることで医師が外来診療に専念することだけでなく、迅速かつタイムリーな医療の提供につながったと考えています。病棟看護師が「何かおかしい」と感じる症例などについても相談対応を行い、エコーや動脈穿刺採血などを実施することで、病棟看護師と連携して異常の早期発見につながる症例が数多くありました。地域支援では特定ケア看護師の可能性を感じただけ

でなく、自己の課題も多く認識しました。7月から自施設に戻って、自己研鑽を続け、また地域支援にチャレンジしたいと思っています。

今後の展望

自施設に戻ってからは、総合診療センターに所属し、患者さまの入院管理を行います。

私の目標は「どんな病気・病期でも『見て』、『診る』ことができる」特定ケア看護師になることです。地域では急性期から終末期まで多種多様な疾患の患者さまが医療を求めて来院します。どんな患者さまにも寄り添える特定ケア看護師を目指して、学び続けていきます。